

この義和団事件が日露戦争の原因になるのです。この事件をきっかけにロシアは北からなだれ込んで来ました。皆さんは土井晩翠の「アムール河の流血や」という歌をご存じですか。アムール河に五千人の中国人をぶち込んで、人間イカダにして流したという悲惨な事件ですが、この事件を手始めにロシア軍は南下して満州を占領してしまふのです。

明治二十七年から八年の日清戦争の結果、日本は下関条約で、次の条件を締結しました。

- 一、清国は朝鮮が完全な独立国たることを認める。
- 二、台湾・澎湖島及び遼東半島を日本に割譲する。
- 三、賠償金二万テールを日本に支払う。

この三条件で妥結するのです。しかし締結からわずか一週間目に、ロシア・ドイツ・フランスの三カ国は共同して日本政府に、「遼東半島の割譲は東洋平和のためにはよくないので、清国に返還せよ」と迫ったのです。三国干渉です。日本はこの三国に対して戦う力などありません。涙を吞んでこの無謀な抗議に従います。「夷を以て夷を制す」というシナ流の外交政策で、遼東半島を取り戻したつもりだったのですが、この見返りとしてドイツは膠州湾（青島を含む）を、フランスは広州湾を掠取します。そしてロシアは、日本が返還した遼東半島をそのまま横取りするのです。清国は三国によって重要地点をもぎ取られてしまいます。清国の「生体解剖」であると言われるゆえんです。

そのうちロシアは、東清鉄道の敷設権を得ます。第二次アヘン戦争のどさくさを利用して、火事場泥棒式に沿海州を奪い、日本海にウラジオストークを開港します。このウラジオストークという名称は、ロシア語で「東方を制圧せよ」という意味だそうです。ロシアはシベリア鉄道をさらに延長して、このウラジオに連結すると同時にチチハルから南下して、大連と結ぶ「南満州鉄道の敷設権」を得るのです。その時に義和団事件が起きたのですから、待ってましたとばかりに大軍を満州に送り込んで来たのです。